

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT28189 プログラム名 からだを透かして見てみようー透明人間できるかな？ー2016



開催日：平成28年7月26日
実施機関：金沢医科大学
(実施場所) (解剖学 I 研究室・D51 講義室)
実施代表者：八田 稔久
(所属・職名) (医学部 教授)
受講生：小学5,6年生 24名
関連URL：<http://www.kanazawa-med.ac.jp/~hrc-jimu/krimis1/hiramekitokimeki/hirameki-tokimeki16.html>

【実施内容】

<プログラムの留意工夫点>

解剖することなく化学的な処理によって体全体を丸ごと透明化することで、体の内部を観察することができる最新技術を体験した。実習に先立ち、「からだの成り立ち」に関する解剖学の授業と、実習のめあてについて解説をおこなった。実験室に移動して、参加者自らの手によるアフリカツメガエルの透明骨染色標本づくりが行われた。骨染色標本は、通常の方法では完成までに長期間かかるが、代表者らが開発した方法により、昼食後には、全員が透明標本を見事に完成させることができた。午後からは自分で作った透明カエルを、ルーペと顕微鏡を使って観察した。さらに、大学の授業で用いるヒトの骨格標本についても詳しい説明を受け、カエルとヒトの骨格の違いについて学んだ。実習内容に沿った実習・観察の手引きが参加者の理解に役立った。また、参加者が自由に顕微鏡撮影できるように、複数の撮影装置付きの顕微鏡を設置した。一人一枚ずつ配布したSDカードに撮影画像を記録し、自宅に持ち帰ってさらなる学習に取り組めるようにした。これにより、時間いっぱいまで熱心に観察と記録に集中することができた。参加者を少人数(5人)の班にわけ、本学学生スタッフを各班に1人ずつ割り当てることで、実習をとおしていつでも参加者が気兼ねなく質問できるようにした。

<当日のスケジュール>

- 9:30～ 受付 基礎研究棟5階 D51講義室
- 10:00～ 開会の挨拶 ⇒ 八田 稔久(プログラム実施者)
科学研究費の説明
ミニ授業「からだのなりたちの話」
- 10:20～ スタッフの紹介
班分け
- 10:30～ 実験の説明、実験開始
カエルの骨染色(30分)
- 11:20～ 昼食、大学探検
- 13:00～ 標本完成
顕微鏡観察
標本の説明
- 13:50～ 休憩

14:00～ ヒトの骨と比べたり、いろいろな標本を見てみよう
15:00～ クッキータイム
未来博士号授与式
解散

<実験の様子>



実験開始



うまく透明になったかチェック



実体顕微鏡で細部まで観察



本格的な顕微鏡撮影で隅々まで記録



ヒトの骨格とカエルの骨格を比較



未来博士号授与式のあと、参加者全員で記念撮影

<事務局との協力体制>

学術振興会との連絡、申し込み受け付け等、本プログラムの実務を実施事務局(本学研究推進課)が行なう。また、実施事務局のもと学内部署と協力して下記の広報活動を行なった。

<広報活動>

- ・ポスターおよびリーフレットを作製し、教育委員会を通じて県内全ての小学校に配布した。

(本学出版メディア課, 実施事務局)

・地元新聞社およびテレビ局に記事掲載, ニュースでの放送を依頼した。翌日に北國新聞に記事掲載がなされた。(本学出版メディア課, 実施事務局)

- ・本学ホームページでプログラム内容を掲示した。(本学出版メディア業務課, 実施代表者)

<安全配慮>

- ・参加者に対し実験前のオリエンテーションをしっかりとおこなった。
- ・参加者5人に対し1人のスタッフを配し、安全面に配慮した。
- ・実験中は手にフィットする実験用グローブを着用させた。
- ・薬剤原液等危険物は用いず、参加者には安全な物質のみを扱わせた。
- ・参加予定者は事前に傷害保険に加入した。実施者, 実施協力者は大学加入の保険を適用した。
- ・実験動物の使用に当っては金沢医科大学動物実験委員会の承認を得た。

<今後の発展性、課題>

我々が開発した独自の透明骨染色標本作成プロトコールに従って、参加者全員が時間内に標本を完成させることができた。年次改良を施してきた観察のてびきは大変有効であった。昨年より導入した、デジタルカメラを接続した顕微鏡は大変好評であり、顕微鏡画像を大画面のモニタで観察しながら参加者自らが撮影するため、興味と理解をさらに深めることができた。撮影用 SD カードは一人 1 枚配布し、自由に撮影した画像を持ち帰り、自宅学習でも活用できるよう配慮した。顕微鏡撮装置2台のほかに、マクロ撮影が可能なデジタルカメラを1台設置したが、参加者全員が殺到したため、常時順番待ちをする参加者が多発した。この点については、今後の改善が必要である。

参加定員は 20 名としたが、受付開始と同時に多数の参加申し込みがあり、予定人数で受け付けを終了することが出来ず、定員オーバーで開講せざるをえなかった。この点について、大学とも協議を行い、適切な対策を施す必要があると考えられた。

【実施分担者】	東 伸明	医学部・教授
	坂田 ひろみ	医学部・准教授
	島田 ひろき	医学部・講師
	東海林 博樹	一般教育機構・准教授
	有川 智博	一般教育機構・講師
【実施協力者】	___ 5 ___ 名	
【事務担当者】	仲田 拓来	研究推進課・事務員